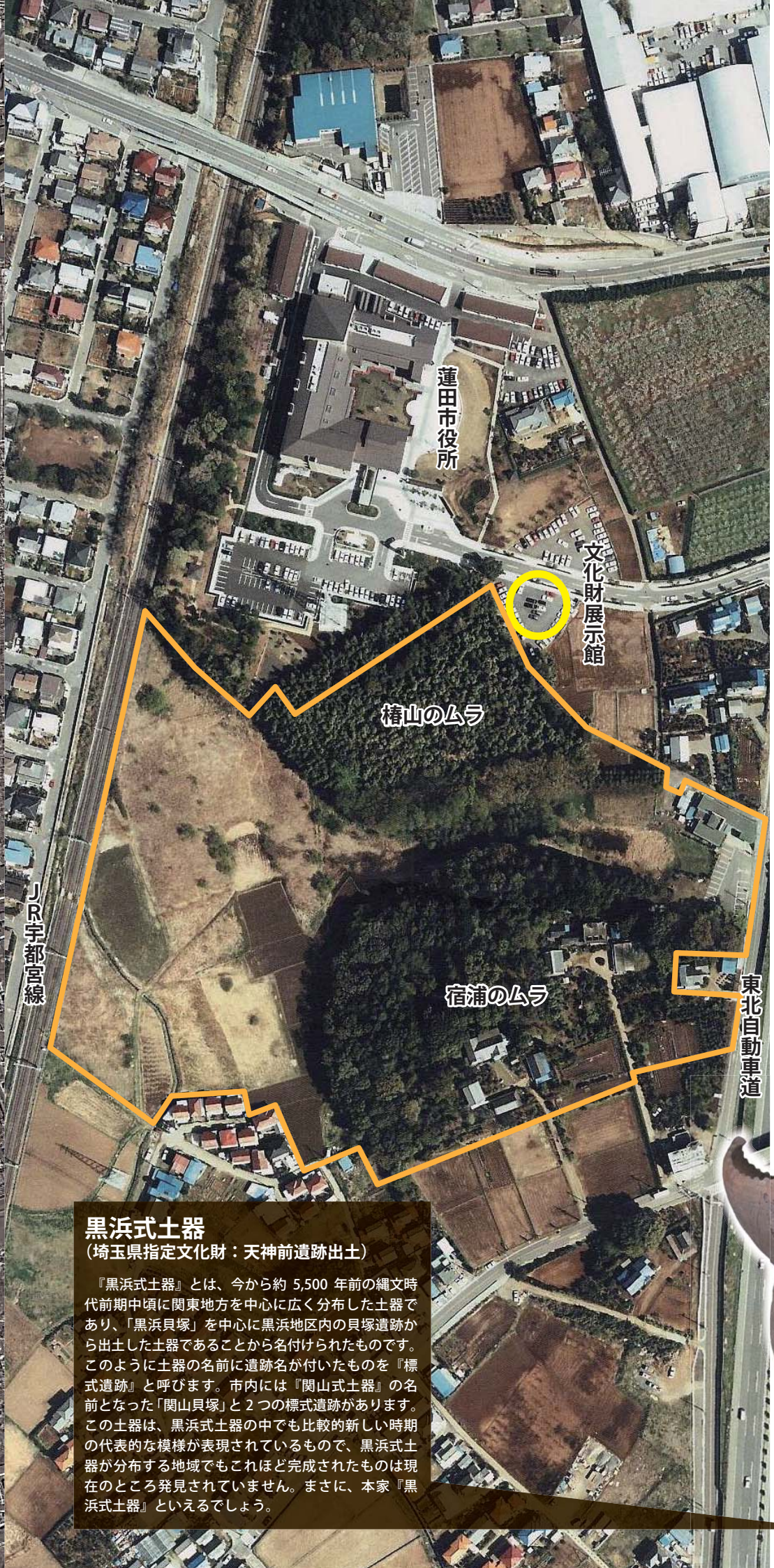
国指定史跡

黒浜貝塚



黒浜式土器
（埼玉県指定文化財：天神前遺跡出土）

『黒浜式土器』とは、今から約 5,500 年前の縄文時代前期中頃に関東地方を中心に広く分布した土器であり、「黒浜貝塚」を中心に黒浜地区内の貝塚遺跡から出土した土器であることから名付けられたものです。このように土器の名前に遺跡名が付いたものを『標式遺跡』と呼びます。市内には『関山式土器』の名前となった「関山貝塚」と 2 つの標式遺跡があります。この土器は、黒浜式土器の中でも比較的新しい時期の代表的な模様が表現されているもので、黒浜式土器が分布する地域でもこれほど完成されたものは現在のところ発見されていません。まさに、本家『黒浜式土器』といえるでしょう。

土器と貝の出土状況（アップ）

6号住居跡から出土した最終末の関山式土器（**県指定**）

貝塚から出土したイノシシの骨（上2段が歯、下が頭骨と肋骨）

タイムカプセルとなる貝塚？

貝塚内からは、普通の遺跡の調査では発見されないような遺物が貝殻によって守られて発見されます。上の写真はイノシシの歯や下顎（したあご）ですが、市内ではこの他に、シカ・イルカ等哺乳類 5 種類、鳥類 1 種類、甲殻類 2 種類、魚類 12 種類、貝類 46 種類が発見されています。

また、甲殻（カニ）類の「（ノコギリ）ガザミ」のハサミや足の先も発見されていますが、現在の関東近辺には生息していないものです。なお、「ガザミ」の生息域は、汽水域（汽水域とは海水と真水の混じりあう海のことです）の泥質帯域であり、当時の黒浜貝塚周辺が海水と真水の混じりあう細かい泥が堆積していた環境であることがわかります。

調査で発見された様々な遺物

黒浜貝塚の 6 号住居跡と呼称した住居跡を発掘調査したところ、前段階の「関山式土器」最終末の土器と一緒に出土した「黒浜式土器」の他、縄文時代前期の特徴的な装飾品である「臼玉（うすだま）」や貝塚遺跡の特徴的な出土品である「貝製装飾品」等が出土しています。特に、「貝輪（ブレスレット）」から転用された朱の塗布された「貝製装飾品」等の様々な遺物が発見されました。

また、貝塚に特徴的な獣骨・甲殻（こうかく）（カニ）類、炭化物等も発見されています。

6号住居跡から出土した貝製装飾品と臼玉（**県指定**）

貝製装飾品（左）と臼玉（右）

6 号住居跡の貝塚から発見された貝製装飾品と臼玉です。貝製装飾品は「貝輪」が割れた後に『転用（再生）』されたもので、両側が丁寧に磨かれています。また、表裏面には「赤色顔料」が塗布されていることが確認されます。

また、『石製装飾品』の写真中にも、「管玉（くだたま）から臼玉へ」と「抉状（けつじょう）耳飾から装飾品へ」と転用（再生）途中の装飾品もあります。『管玉・臼玉』はペンダントの玉として使用されていたものです。再生してまでも活用する縄文人の現代に通じる『リサイクル性』が感じられます。

ガザミの現生標本

貝塚から出土した（ノコギリ）ガザミの足先

遺跡内から発見された様々な道具

黒浜貝塚からは、他にも様々な道具類が発見されています。石器類では「狩猟用の石鏃（鏃）」、「肉類加工用の石匙（ナイフ）」、「伐採道具の磨製石斧」、「土掘り道具の打製石斧（シャベル）」、「木の実類加工用の石皿、磨石、敲石」の他、貝塚遺跡に特徴的な「軽石製の浮子」も発見されています。

中にはツマミ状の把手が付き、この上に螺旋状の模様が刻まれた装飾的なもの（右）も天神前遺跡から発見されています。「浮子」は魚釣り等に使用されていたと思われ、将来「釣り針」も発見されることも考えられます。

様々な形の軽石製の浮子（**県指定**）

住居跡に捨てられた貝（宿上遺跡 23 号住居跡）

遺跡内から発見される様々な貝塚

黒浜貝塚からは、先に紹介したような貝塚の他にも様々な貝塚が発見されています。上の写真も住居跡内に捨てられた貝塚ですが、これらは住居が廃絶された後に、『穴』となった窪みに貝殻を捨てた「ごみ穴」です。この住居は深さ 80 ㎝、長さ 8m、幅 6m程と推測され、他の遺跡で調査した例から推測すると、貝殻は合計 15 万個以上捨てられているものと思われます。

右の写真は、生活の場に廃棄された貝塚ですが、中期以降の貝塚はこのように当時の生活の場であった面の中で、使用していない斜面などに『馬蹄形状』に形成されるようになります。前期では非常に稀であり、写真のように小さいものもありますが、天神前遺跡では東西 25m、南北 20mにも及ぶ範囲に捨てられているものも存在します。

石製装飾品（左から抉状耳飾、転用途中のビーズ、ペンダント；**県指定**）

貝塚から炭化して出土したクルミ

貝塚から発見されるその他の遺物

貝塚からは、これらの他に炭化物も良好な状態で発見されます。上は貝塚から発見された「（オニ）クルミ」の殻の炭化したものです。他の遺跡でも貝塚内から「（オニ）クルミ」の炭化物は数多く発見されています。

殻を燃料としても再利用していたことを示しており、ここにも縄文人の現代に通じる『リサイクル性』が感じられます。

縄文時代の生活面に捨てられた貝

湧水池を訪れる野鳥たち（オシドリ）

低地に残る豊かな自然

低地には市役所に近接する立地条件、市街化区域であるにもかかわらず、豊富な湧水が存在し周囲には緑が溢れ、四季かおる豊かな自然環境も残され、四季折々の野鳥もこの水辺へと訪れています。

縄文時代にもこの谷は縄文人の『水汲み場』等に利用されていたものと思われ、いにしえの時代から人と自然が共生してきた面影をうかがわせる場となっています。

発見された海の痕跡

低地部南西の自然科学分析調査（★）で、縄文時代前期の海（海岸線）が存在する事が分かりました。特に上限は海抜 2.67m、下限は標高約－3.8mであり、海成層は約 7m堆積していることが判明しました。

また、この地層最上部の木片の分析から、5,040 ～ 4,850 年前の数値が、さらに下の層から 5,430±30 年前の数値が得られています。上の層の年代は周辺貝層データからは縄文時代前期黒浜式土器に後続する諸磯（もろいそ）a（エー）式（しき）土器の段階と推定される時代の数値と同じもので、下層の年代は黒浜式土器の時代であり海抜 2.3mでした。

7号住居跡から発見された貝塚

発見された貝塚と南のムラ

黒浜貝塚（宿浦のムラ）からは、合計住居跡 41 軒、土坑約 50 基が確認されています。このうち、5 軒の住居跡内に貝が捨てられ貝塚が形成された他、当時の生活面に捨てられた貝塚も 5 ヶ所確認されています。

また、南側に隣接する遺跡も同時期の環状に廻る貝塚だけで 9 ヶ所あることが記録に残されており、東北自動車道の発掘調査でも 3 軒の住居跡と貝塚が確認されていることから、同様に大きなムラがあったことが推測されています。

酒詰仲男記録ノート（昭和 17 年）より転載

硬砂層採掘露頭面

一番東側で発見された「採掘跡」です。ここはこの上に存在する「ローム土」が全て取り除かれていました。

縄文人の土木工事

黒浜貝塚の中央に広がる『広場（凹地）』は、東西約 50m、南北約 40mの範囲に広がる集落中央の広場の「関東ローム層」を最大 80 cmも削り広場としたもので、黒浜貝塚の縄文人が行った大きな土木工事の痕跡です。約 1,600 ㎥の土砂を現在の工事に換算すると 2t トラック 800 台分が運び出されたことになります。

縄文時代後期以降の『凹地』の土は、青森県三内丸山遺跡の「環状盛土遺構」と呼ばれる痕跡のように凹地の周囲に盛られますが、これより古い前期の黒浜貝塚では「ローム土」の行き先が現在のところ発見されていません。『凹地』は北側の谷に向かって開口していることと、谷には「湧水等」集落と一体で活用されていたと考えられることからも、低地の造成に利用されていたものと推測されます。

なお、黒浜貝塚の縄文人の工事跡と判断した理由は、①この凹地に切られるような前期の住居がないこと、②住居跡が全て凹地から一定間隔で存在すること、③現存する宅地の造成にローム土が使用されていないこと等からです。

縄文人も活用した７万年前の石？『硬砂層（かたすなそう）』

元荒川を見てもわかるとおり、蓮田の川原には石は存在していません。縄文時代にも同じ状況であったことでしょう。当時の蓮田周辺の縄文人にとって「石」は貴重な資源だったと思われます。

谷に面した斜面部には「硬砂層」と呼ばれる硬い石のような地層が崖に露出していた部分を当時の人々が発見し、縄文時代前期及び古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて、様々な生活部材の確保・利用を目的とした採掘場所が確認されています。

特に縄文時代前期には、黒浜貝塚出土のカキ殻だけでなく、隣接する宿上遺跡・宿下遺跡の貝塚からも硬砂ブロックの着生したカキが検出されていることからも、採掘した硬砂ブロックをカキの着生・半養殖を目的とした着床材として利用されていたことが推定されます。（前頁の地図参照）

掘り込まれた「硬砂層」（左）とその残骸（右）

硬砂層以下の地層断面

蓮田の地形が形成され始めた頃の地層

この写真は、「硬砂層（中央の白と灰色の層）」と「関東ローム層（白い層より上）」、及びそれ以前の蓮田の地形が徐々に形成され始める頃の地層です。

「硬砂層」の下にある部分は粘土層であり、これ以前にはこの地が水の中にあったことを教えてくれています。「硬砂層」はおよそ７万年前の川の流れによって形成された『自然堤防』の砂です。今でも元荒川に堆積している砂のような状態であったと思われます。これがその上に数万年に及ぶ「火山灰」の堆積により形成された『関東ローム層』中の成分により徐々に「硬化」し、加工のし易い「硬砂層」が形成されたようです。

最近では市内の台地縁辺の至る所から「硬砂層」が発見されています。

硬砂層断面のアップ

硬砂層とは…？

「硬砂層」は、はるか昔の河川の堆積物である自然堤防の砂です。この層の上に「関東ローム層」と呼ばれる火山灰の土が堆積し、ローム層中の成分が長い年月をかけてこの砂に浸み込んで形成されたと考えられています。

黒浜貝塚で発見された「硬砂層」は、大宮台地と呼ばれる周辺の台地に存在する「硬砂層」の中でも、「蓮田市周辺の硬砂層」は非常に堆積が厚く40 cmほどの厚さがあります。

この厚さは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての古墳の石室（せきしつ）や竈（かまど）の材料としても充分な厚さであり、様々な生活部材として利用されたのでしょう。

対岸の村 (椿山のムラ)

市役所側には「椿山遺跡」と呼称されているムラが存在し、縄文時代前期だけでなく、縄文時代中期、後期、古墳時代中期、後期、平安時代の集落や古墳跡が残されています。特に縄文時代前期には、合計住居跡 12 軒、土坑数基等や硬砂層露頭部も確認されていますが、同時期の遺跡が谷を挟んで形成されているにもかかわらず、椿山遺跡内では貝塚を伴わず、黒浜貝塚では貝層が形成されるという興味深い結果が確認されています。

椿山遺跡1号住居跡

椿山遺跡 101 号住居跡から一緒に出土した関山式土器と黒浜式土器

宿浦・椿山のムラと周辺の遺跡の状況

椿山のムラでも貝塚遺跡に特徴的な「軽石製の浮子」以外の石器類はほとんどが発見されていますが、「装飾品類」は黒浜貝塚と比較すると、「玦状耳飾」1点のみと非常に少ないようです。このことは周辺の他の遺跡からもわかることですが、装飾品類を多様に有する遺跡は規模も大きいのに対し、少ない遺跡は規模も小さいようです。

周辺の遺跡も比較すると、環状に集落が展開する天神前遺跡が 36 軒で 10 数点、宿下遺跡が住居跡 25 軒で 7 点、宿上遺跡が住居跡 23 軒で 1 点であるのに対し、宿浦のムラでは調査された住居跡が 1 軒のみにもかかわらず 7 点が出土しており、全体での出土量も推して図ることができるでしょう。

年　代	時　代	日本の主なできごと	蓮田市のできごと
	旧石器時代		市内各所に人々が住み始める
紀元前 15000 年 (13,000 年前)	縄文時代 草創期	土器を作り始める	
	縄文時代 貝早期	海水が上昇を始める (→気候の温暖化)	市内にも、海が進入し、黒浜地区を中心に
		関東地方を中心に	**貝塚が多く形成され、**大きなムラができる
紀元前 3000 年 (5,000 年前)	縄文時代 貝前期 硬	「関山式土器」が流行 (6,000 年前)	海水が市内から退いていく (5,000 年前)
		「黒浜式土器」が流行 (5,500 年前)	宿下・馬込八番遺跡に大きなムラができる
	縄文時代 貝中期		
	縄文時代 貝後期		雅楽谷、久台遺跡に大きなムラができる
	縄文時代 晩期		久台遺跡に大きなムラができる
紀元前 400 年 (2,400 年前)	弥生時代	稲作が始まる	宿下遺跡に再葬墓が作られる
		邪馬台国に女王卑弥呼が君臨	ささら遺跡に大きなムラができる
紀元 0 年	貝古墳時代 硬	古墳を作り始める (埼玉古墳群)	馬込八番遺跡の古墳に埴輪が並べられる
			十三塚古墳などが作られる
710 年	貝奈良時代 硬	法隆寺の建立	
		奈良に都 (平城京) ができる	
		全国に国分寺が作られる	「蓮華院」に義澄が泊まる？
794 年	貝平安時代 硬	京都に都 (平安京) を移す	荒川附遺跡で鍛冶屋が開業される
			※以後、市内各所で鍛冶屋のムラができる
1185 年	鎌倉時代	平将門の乱がおこる	椿山遺跡の鍛冶屋の最盛期
		源頼朝が幕府を開く	江ヶ崎城など、市内に城や館が作られ始める
1338 年	室町時代	南北朝の対立	行蓮が鰐口を寄進する
		足利尊氏が幕府を開く	寅子石が建てられる
			南朝銘の板碑が建立される
	(戦国時代)		太田氏房の「制札」、北条氏直からの
1603 年		豊臣秀吉の天下統一	「雪舟の達磨絵」が真浄寺へ
		徳川家康が幕府を開く	
	貝江戸時代	家光が 3 代将軍となる	平源寺へ家光から「朱印状」がおくられる
			円空が市内各家へ仏を残す
		吉宗が 8 代将軍となる	閏戸の式三番復活
			見沼代用水が開通
1868 年	明治時代	明治維新	蓮田駅開業 (明治 18 年)
1912 年	大正時代	第 1 次世界大戦	武州鉄道開業 (昭和 13 年に廃止)
1926 年	昭和時代	第 2 次世界大戦	昭和 29 年、3 町村が合併し、蓮田町となる
			昭和 47 年 10 月、市制施行
1989 年	平　成	21 世紀に入る	平成 18 年　7 月、黒浜貝塚が国指定史跡に
			平成 24 年 10 月、市制施行 40 周年

貝 市内で貝塚が確認された時代　硬 硬砂層の利用が確認された時代

黒浜貝塚 (宿浦のムラ) とは…？

以上のように黒浜貝塚は、「黒浜式土器」の名前が付いた遺跡として重要であるばかりではなく、意図的な凹地（広場）の造成、生活基盤の一つである貝殻採集のための硬砂層の利用等、当時の蓮田市周辺の自然環境を熟知し、調和を図った生活組織構造と人々の具体的な行動様式が垣間見えます。

また、ほぼ同時期の遺跡が谷を挟んで形成されているにもかかわらず、椿山遺跡内では貝塚が形成されず、黒浜貝塚では貝層が形成されるという同様な環境の中でも対照的な集落が形成されている点も特筆されます。さらに南側にも貝塚を持ち、環状にムラが廻ると推測される同時期の集落が存在した記録が残されています。

これらの成果を基に、元荒川に入り込んでいた海水域を生活舞台とする縄文人達のより詳細な社会構造、意識構造を理解することも可能であり、今後は周辺遺跡も含めた構造を把握し、史跡「黒浜貝塚」がより理解できるように細部にわたって調査を実施し、皆様にお伝えしていきたいと考えています。

黒浜貝塚

黒浜貝塚は、関東地方を中心とした縄文時代前期中葉「黒浜式土器」の標式遺跡・貝塚として、昭和 50 年 3 月 31 日に県指定史跡に指定されました。その後の確認調査により、集落中央部分には北側谷部に向かって開口する東西約 50m、南北約 40mの窪地状の広場を取り囲むように住居跡 31 軒、土坑 40 数基、生活面廃棄貝層 5 ヶ所が存在し、規模は東西 150m、南北 95m程の範囲に広がることが確認され、平成 18 年 7 月 28 日に『国指定史跡』、平成 25 年 10 月 17 日に追加指定されました。

縄文時代の自然環境

自然化学分析調査の中で、当時の花粉（植生）分析も行った結果、気温が 2～ 3℃高い当時の環境であれば、ツバキ・タブノキ・クスノキなど常緑広葉樹の森であるはずが、コナラ属が 80%を超え、この他にはアサダ、アカガシ類が 5%前後、スギ、ヒノキ、クルミ、ハンノキ、ブナ、ケヤキ、ムクノキ類が 1% を越えていました。

この結果から想像すると黒浜貝塚周辺の丘陵部には、コナラを主体にアサダ、ケヤキ類などの落葉広葉樹林が広く生い茂り、常緑広葉樹のアカガシ類が丘陵尾根部に、スギ、ヒノキ類は丘陵斜面部を中心に生育、低地部に広がる海の干潟周辺には、アシ・ヨシ群落やイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ類などが生育、湧水周辺の淡水にはクルミやハンノキが分布・生育していたと推測されます。

特にコナラ属が 80%を越える森は、農家の裏山的二次林植生の様相を示す『ドングリの森』であり、「里山」的な状態を想像させる結果で、現在の黒浜貝塚と同じ景観であったと言えます。

低地の豊かな自然（ハンノキ群落：市指定文化財）

写真のように、現在でも季節により湧水があふれ、野鳥も訪れる環境が残されています。

黒浜貝塚の縄文人も「水汲み場」等に利用していたことでしょう。また、元荒川本流域の谷には海水が進入しており、多くの「海の幸」を採取することができたであろうことが、貝塚出土の様々なものから想像されます。

『国史跡』の指定にあたり

蓮田市長　中野　和信

蓮田市は、首都圏40㎞圏内にある交通至便なまちです。一方、多くの水辺、点在する屋敷林の緑が四季折々の彩りを見せる水と緑の豊かなまちでもあります。

平成 18 年 7 月に市役所庁舎に隣接する黒浜貝塚が『国史跡』に指定されました。貝塚としては県内 3 番目、県内で国の史跡指定となったのは実に 22 年ぶりでした。

市では今後、都市部に奇跡的に残された黒浜貝塚を保存整備し、多くの皆様に活用され後世に誇れる、自然と人にやさしい交流の空間として有効利用してまいりたいと考えております。

最後に、国史跡指定に当たりご理解・ご協力いただいた多くの地権者の皆様に感謝申し上げます。

※団体（10 名様以上）で史跡の見学を希望される場合にはご連絡ください。

お問い合せ・連絡先：蓮田市教育委員会社会教育課文化財保護担当　TEL：048-765-1730　蓮田市文化財展示館　TEL：048-764-0991